

韓国の日本語学習者に見られる誤用例の分析

金 亨哲*・鍵本 有理

An Analysis of the Grammatical Misapplication in Korean Speakers of Japanese

Hyonchoru KIMU*・Yuri KAGIMOTO

1. はじめに

初級レベルを修了し、ある程度日本語の読み書きができるようになった日本語学習者の誤用例を分析することは、日本語研究のためにも有効である。

ここに資料として取り上げたものは、金が2000年度に受け持った韓国の日本語クラスの学生（大学2年生）の文章である。テーマは自由に選ばせ、レポートもしくは作文として提出させた30人分のものである。

これまでも、誤用例については、総論的に、またそれぞれの学習者の母語の影響等について、さまざまな観点から分析がなされているが、本稿ではまず、クラス全体としてどのような間違いが多いか、その傾向を明らかにし、その後、個々の例について見ていくことにする。今後の日本語教育の参考資料とするとともに、多くの日本語学習者に共通することがらとして参考になれば幸いである。

2. 誤用例の分析

2.0 全体的な傾向について

日本語学習者の作文の誤りを指導するとき、その誤りには、文字・表記から、文型や語彙、文法の問題などさまざまなものがあり、さらに上級レベルになると、例えば、状況に合わせた表現が要求され、文法的には正しいが不自然に感じるものなど、「国語表現」の指導に通じるものもある。また内容として文化の違いが反映することもある。ここでは初級レベルを修了した学習者の作文を対象とし、その誤用例の中でも文法的な事柄を中心に取り上げる。したがって、母語（この場合、韓国語 — 本稿ではこの名称を使用する）の干渉の例としてよく知られている音声の問題について、例えば、

- a. 長母音と短母音の誤り — ほほです（←方法です）、おとさん（←おとうさん）、しゅうみ（←趣味）
- b. 有声音と無声音の誤り — そつきょうして（←卒業して）、おにきりをもって（←おにぎりを……）
- c. 促音についての誤り — ゆくり（←ゆっくり）、みったい（←みたい）、ストレス（←ストレス）

などの誤用が多く見られたが、ここに例を挙げるにとどめておく。

さて、音声以外の問題で、全体に共通して見られた誤用例について見てみると、およそ次のような問題点を取り出すことができた。

- ・助詞の問題
- ・活用の問題（形容詞・形容動詞）
- ・語彙の問題
- ・時制の問題（アスペクト）

もちろんこれ以外にも個々の誤りはあるが、本稿ではこれらの問題に絞って、以下にそれぞれについて、例を挙げなが

*韓国済州漢拏大学非常勤講師

ら考察する。誤用例については煩をいとわず、ほぼ全ての用例を挙げた。問題点として取り上げた語以外にも誤りのある場合があるが、訂正はせず、原文のまま掲げ、意味がとりにくいものについては、その語の上に注記した。また学生の氏名の代わりに、こちらで付した番号を記してある。その誤りが同一学生によって繰り返されているのか、他の学生に共通するものなのかを見るために有効と考えたからである。

2.1 助詞の問題について

(1) ノ

- a. まちで行くの時おばあさんが子供の手を (24)
 茶を飲みながらかれらはすみでてんしんらんまんして遊ぶのこともとおかあさんに (10)
 雨の日も風が吹くの日も農場に行くのは扱ばない人です。 (9)
- b. はははバイランスがこころなかにあるせつないしふかい愛をわかているので (11)
 ひとたちは女士うちに追われてきました。 (10)
 ケーキとくだものをさらうえにのせました。 (10)
 ちょっとめんくらの顔でへやなかをみました。 (10)
 いまところはすべてのことが……たいへんですがもうすくなれるとおもいます。 (1)
- c. もう15年のまえのことなのにいままで記憶がのこっていった (17)
 風邪ぐすりを飲みましたがいままで頭が痛いとねつがありました。 (25)
 しんじゅより もっと きれいな あさつゆ ように あたしの こころにかなしみが ひとつずつ (16)
 どうしようもない まるで月がないから道がくらしいように (19)

よく知られている誤りであるが、簡単にまとめておく。まず、a.のような動詞の場合、韓国語では終止形と連体形の区別があり（日本語では現代語において形に区別がないが）、連体修飾のときにノを入れてしまうことがある。また韓国語にも、日本語のノに当たる語が存在する（「姉のかばん」、「スズメの巣」などに用いられる）が、場所や時を表す名詞が後に来るときなどは、しばしばノが省略されることがある（「来週の月曜日」は「来週月曜日」、「バラの花」は「バラ花」のように表現される）。そこでb.やc.のような誤用が見られる。b.の場合は「～の中」「～の上」といった場所を示す場合であり、c.は時間や、「～ように」のような形式名詞の場合である。いずれも日本語では名詞の場合にノを必要とし、動詞・形容詞の場合は連体形のみでよいことを徹底させたい。

なお、中国語話者にも同じ誤りがよく見られる。中国語では連体修飾の場合、「的」を用い、例えば、「来る人」は「来的人」のように表現するため、母語の干渉により「来るの人」のように誤るのである¹⁾。

(2) ヲ、ニ

- みちで あなたを あう いんねんを かんしゃ (14)
 いつも その そぶを あう ことが できます。 (21)
 かさをもってこなかったにあめを会ったにできる。 (24)
 ほんとに驚いて何も見えなくなって、私の車をふつかた車の人が (18)
 それからむすことむすめとしようらいの希望にはなしました。 (25)
きを ふたたび きました (14)
 くるまをうんでんして里事務所を行ってぎょうむの (25)
 いまはやかんをかよいながらひるはしことをしています。 (1)
タクシーを乗っておおまちで行った。 (24)

韓国語の文法は日本語とよく似ているところがあり、助詞ヲ・ニ・デに相当するものもある。しかし、当然のことながら全く同じというわけではなく、意義用法は微妙に異なっている。代表的なものを挙げると「会う」「似る」「乗る」

といった動詞は、韓国語では他動詞でありヲをとる。他の外国語でも、

I read a book.

I meet him.

という文型を考えればわかるであろう。フランス語を母語とする学習者の場合も「私をついてきて」のような誤用が見られ、むしろニをとるほうが少数であるといえよう。

森田良行『基礎日本語辞典』²⁾の「～に」の項には「行為の対象を示す」場合として、

もっとも一般的な用法である。(中略)

「に」が「を」と入れ替え可能な例もある。「知人に頼る→知人を頼る」

対人関係を前提とした自動詞(もしくは自動詞寄りの他動詞)で、全人格的・精神的な行為を表す語が「に／を」どちらの格も取るのである。「焦がれる、あこがれる、ほれる、恋する、嫉妬する」など。また、

「女子学生を教える→女子学生に教える」

のように、「……ヲ他動詞」文型のヲ格に立つ目的語が人間のため、ニ格にもなり得る場合もある。このニ格の文型は、実は「……ニ……ヲ他動詞」で、「女子学生に英語を教える」のように事柄が目的語としてヲ格に立つ。

と説明されている。また、「～に似る」のニについては、「比較の対象を示す」ものでトと入れ替え可能であることを述べている。

ところで、このような助詞の交錯について、文法史の面から二、三指摘しておきたい。日本語のみを考えても通時的に見たときに、ヲとニが交替した例がある。例えば「そむく」という語は、現代語ではニをとるが古くは「～をそむく」とヲをとっていた。このことについて信太知子³⁾は、上代から近世までの用例の調査を行い、ヲからニへ交替した理由についてまず「そむく」の語義の変化の面から、

「そむく」の原義は、ある具体的な場所(方角の場合もある)に背を向ける意と思われ、主体から対象へという方向とは別の方向を向く動作を持った語で、対象語は動作の起点を示していると思われる。動作の起点を「を」で表示することは、

学校を六時に出発する

のように現代語でも普通に使われる用法である。具体的な場所ではないが「世」の場合も原義に近い意味で用いられたものであろう。ところが、対象語として「人」や国家の場合も出てくるということは、何かに背を向けるという具体的な動作性が薄れ、「人」の考え方や立場に対して反対するという精神的作用をも意味することができるようになったものとして考えられる。この場合、主体と対象はいうなれば対立関係にあるといえよう。更に対象語が「法」「命令」「道理」などその実体がないようなものになると、その精神的作用の意味合いはますます強くなり、「法」「命令」などよりも、更に抽象的な「心」が対象語となるに及んで、「そむく」という語は、原義の動作性を失い、主体の精神的な作用を示すだけになり、主体と対象の関係も原義では対象から主体へという方向であったものが、対象語は主体の精神作用の及ぶ帰着点となり、逆に主体から対象へという方向に変化したものと考えられる。動作の帰着点は、現代語において

彼の意見に賛成する

というように、普通「に」が用いられている。このように考えてみると、心-法-人という順序で「を」から「に」へと格助詞が交替するのは「そむく」の原義の動作性がどれだけ薄れているかという「そむく」の語義そのものが関係しているといえそうである。

と述べている。そして間接的に、その背景として助詞「を」の変遷ということ(格助詞としての機能確立)が関係しているという点を取り上げている。

また「会う」という動詞も、古代語の用例からみると、アフ(下二段)に対する自動詞として存在し、また、よく知られている例だが、

……ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、鶯かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道は、いかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。……(『伊勢物語』第九段 東下り 引用は「新編日本古典文学全集」に拠る)

などのように、古くは「相手が(自分に)会った」という言い方が存在する⁴⁾。「別る」も『万葉集』などでは、

たらちねの母を別れて[波々乎和加例弓](巻六 一〇三〇番 以下引用は「新編日本古典文学全集」に拠る)

のようにニをとっていた。逆に「恋ふ」は、

島の宮 勾の池の 放ち鳥 人目に恋ひて〔人目尔恋而〕 池に潜かず (『万葉集』巻二 一七〇番)

妹に恋ひ〔妹尔恋〕 吾の松原 見渡せば 潮干の渦に 鶴鳴き渡る (同 巻六 一〇三〇番)

とニをとっていた。「恋ふ」は、「眼前にないものに心惹かれることをいう」(『時代別国語大辞典上代編』)語で、そのため「～に恋ふ」という言い方がなされた。

これらは助詞のみの問題ではなく、動詞本来の意味に日本語と韓国語とで微妙な違いがあり、その動作のとらえ方が異なっているのである⁵⁾。もちろん一律に「を→に」とは直せない。初級の学習者には、

～が～を～する (単純な他動表現)

～が～に～する (対面の表現)

の二つの基本的な文型をまず徹底させ、その中で、まず母語と違うもの、また、先生が子供に教える。

母は兄にひどく怒りました。

のように「頼る」「憧れる」「嫉妬する」「恨む」「恋する」など、精神的な働きかけを示すもので、ヲとニが置き換え可能なものについて注意していく必要がある。使い分けの理由等については、個々の語の問題でもあり、あまり細かく説明する必要はないであろうが、日本語の研究の面からは、このような視点も持つておくべきであろう。

なお、上記の動詞のうちいくつかは、

友人と会う

車とぶつかる

のようにトを用いると、お互いの働きかけととらえられる違いがある。

また移動を表す「行く」などは、ヲを用いると、

山を登る

川が町を流れる

道を行く人

のように、目的地ではなく、一定のコースを進む、経過点に重点をおいた表現となる。この点から教える必要があろう。

従来、「態 (ヴォイス)」の表現について、日本語では受動構文が使われやすいという指摘がなされている⁶⁾が、このように個々の動詞を見ても、事象の捉え方が違っているのである。助詞のみの問題ではなく、動詞本来の意味に日本語と韓国語とで微妙なズレがあることを心得ておかなければならない。

(3) ニ、デ

その きの したで あそびに きる かわいい しょうねんが いました。 (14)

まちで行くの時おばあさんが子供の手を (24)

私は城山邑事務所にきんむをおわって (25)

ごご二時五十三ふんに西歸浦中央洞のうちにかえりました。うちに日本語をよみなから (25)

タクシーを乗っておおまちで行った。 (24)

また受験生の間にも寝る時間がしげんの当落をけっていするたいじなごとたとにんしきしてあります。 (12)

ここではまず、韓国語との違いについて簡単にまとめておく。

韓国語の場所や方向・到達点を示す助詞は以下のようなものである。

로/ 으로 ~で (手段・方法)、~から (材料)、~の方へ (方向)

에/ 에게/ 한테 ~へ・~に (到達点)、~に (場所・時)

에서 ~で (場所)、~から (場所の起点)

まず、로は、「耳で聞く」(手段)、「石で (から) 作られる」(材料)、「右にまがる」「海に行く」(方向) など幅広く使われ、これが誤用の原因の一つとなる。

他の言語を母語とする場合も、ニとデの区別は難しいものである。原則的にはニは存在する場所を、デは動作・作用

が行われる場所を示すとされる⁷⁾。

私はそこにごみを捨てた

私はそこでごみを捨てた

韓国語の場合も、**에/에게/한테**は「に」、**에서**は「で」と、一見似たような使い分けがあるようだが、
風でドアが閉まる

一万ウォンで買った

のような原因、値段のようなものには**에**を使うのでやや注意が必要である。

全体に、二とすべきところをデとしている誤りが多いのは、このような母語の干渉があるためと考えられる。誤用例の三番目の例は、動作であるから「で(での)」に直すという説明ができる。

また、最後のものは、日本の国語表現でも見かけることのある誤りで、文の始めと終わりが対応していない。

受験生の間にも……という認識がある(存在)

受験生の間でも……認識されている(動作)

の区別をすればよい。

2.2 活用の問題 — 形容詞と形容動詞 —

a. わたしがつくったりょうりをほかのひとがたべてみるまえにはたべないわらしいくせがあります。(1)

私が彼に水があらないのでいけませんと言いますから、(18)

それから値段も安く商品が多いそろっているので一つの店で買いたい物を全部買うことができる。(5)

うさぎは あわただしい ゴールに むかって はしりました。(16)

これからもスーパーは多い人たちが利用するのでまたよいスーパーがますますふえれば よいと思う。(5)

b. はははきれいハンカチをだしながらかれに気にいるハンカチをえらばされた(11)

アルバイトをしなければならぬので時間がないし物価もたかいしとても住みにくいだったといいました。(3)

20時間以上寝るあかんぼうたちに人々は怠け者たといわないです。またなんじかん寝ない老人たちにまめめしいたといわれません。(12)

おとこより おんなが もっと こわいたという はなしが できるように しよう(23)

そのとき かたが ひどりで ひどいに かたむきました(21)

私の利己的なこと、とやかくなことで心がいたいにしたこめんな心、はずかしいな考えなど、今は表現するようにしよう……近づいて来る秋がもっとうつくしいであただかになります。(7)

それから姉夫に私は手がみにくいなので……いいながら(17)

a.は基本的な活用の誤りで、特に2番目は「ある」という動詞の否定形は「ない」という形容詞になるという例外的なものである。そのほか、連用形(「〜く」)を使いこなせていないものが若干目立つ。

b.は形容詞(第一形容詞・イ形容詞とも)と形容動詞(第二形容詞・ナ形容詞とも)の区別を誤ったものである。後述するが、韓国語には形容動詞に相当するものがなく、動詞の活用よりも形容詞・形容動詞について誤用が多い。時間をかけて指導する必要がある。

なお、1例、

行って多い物がそろっているのを見るとこどもたちもたのしいといっている。(5)

という誤用があったが、「多い」という形容詞は、連体形がない(連用形が名詞のように使われる)、例外的なものであり、注意を要する。森田良行は次のように説明している⁸⁾。

「多い」は「多いときには……」「多いほうがいい」のように「とき、ばあい、うち、ほう、こと、の、はず」などの形式名詞を続ける場合によく用いられる。普通名詞が続く場合は「多くの人」「多くの国」と「多くの」が用いられる。ただし、「血の気が多い連中」「雨の多い年」のように、名詞句中の述語に立つ場合は、普通名詞に係っていても「多い……」が用いられる。

2.3 語彙

(1) 個々の語について

ここでは、いろいろな語の使い分け、用法について考察する。

- a. 私はびっくりして見ているなのに、父は大きくて笑って“迫力があっていい”といいながら (18)

「大きい」という形容詞は、物事について「右のほうが左より大きい」「大きい音」のように面積や高さ、規模など、状態を表すのに使われる。動詞とともに使われる例を考えると、「紙を大きく切って……」「はい、息を大きく吸って」と、「紙」や「息」が「大きい」こと、いかにすればその動作の結果、大きい「何か」ができあがるような場合となる。同様に、「大きく食べる」「大きく騒ぐ」などの言い方も不可能である。

そこで程度を示す場合は「大いに」を使うか、あるいは「大笑い」という複合動詞を使う（「大きくなる」などの言い方はあるが、これは変化の結果、その状態になる、できあがることを示すものである）。

- b. きは あまりにも しあわせでした。 (14)

スーパーの良い点はこのごろ家の近くにあるのでべんりし、 (5)

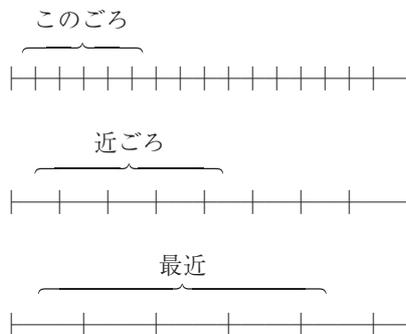
この2例については、森田良行『基礎日本語辞典』⁹⁾により、説明を加える。まず「あまり（あんまり）」という語は、下に否定形がくる場合と、肯定形がくる場合とがある。肯定形の場合は、

あんまりおいしかったので食べ過ぎた

あまりの驚きにしばらくは声も出ない

のように、後件にマイナス面や、「ただ～するだけであった」というようなものがくる。

また、「このごろ」という語について、森田良行は、以下のように図示する。



そして、「近ごろ」は「このごろ」よりやや時間単位のスケールを大きく取っている、「最近」は、さらに時間単位のスケールが大きいもので、「このごろ」「近ごろ」は継続状態の表現（一回限りの動作については「このごろ……ない」のように打ち消し形となるのが普通）であるのに対し、「最近」は、一回かぎりの瞬間的な出来事（過去の一時点）にも使え、用法が広いとする。

また、

「国語審議会は、最近漢字表の改正案を発表した」「彼は最近新しい小説を書き出したようだ」「ごく最近刊行された週刊誌」「彼は最近上京した」

は、「このごろ」に換えられない。「このごろ」はほとんど「最近」に置き換えられるが、「最近」は「このごろ」に言い換えのできぬ場合も多い。

としている。

さらに考えてみると、「このごろ」だと、時間の幅が狭く、ある程度限定されたものとなり、例えば少し前まではよそにあったものが移ってきたような場合や、ある程度期間が限定された一時的な状態をさすことになる。建物のように

恒常的に存在するものについてはやや不自然な表現になろう。「ある」のような、存在を表す動詞の場合、注意する必要がある。

なお、

このごろ(は)家の近くにもある

という言い方なら可能である。近い過去にできたような場合となるからである。

b. どの おばさんのかさ。 (24)

(大 門 下)
どの家おおもんしたに雨を避けてたつた。 (24)

とんな人たちはたくさん寝るしとんな人たちはほとんどすこししか寝ません。 (12)

これらはいずれも不定のことがらを示す「ある」を使うところである。韓国語では「どの」「ある」が同じ語で示されるため、このような間違いが起こる。

(2) 漢語サ変動詞・形容動詞について

a. ひましにちちのそんなすかたがもとせんめいします。 (9)

(ゆっり茶)
ゆくり余を飲みなからかれらはすみでてんしんらんまんして遊ぶのこどもとおかあさんに (10)

ただ すわって らくに やすみ しずかな ところが ひつようする (14)

ASEAMはなぜ台湾を外面するのか (15)

目をとじたまま音を聞いていると心が気楽する (19)

b. 全世界の関心が集中になっています。 (15)

成熟なった民主主義を成り立った台湾は (15)

台湾は国際社会から孤立なった元は中国と複雑な関係があるからた。 (15)

円満に解決にできないのは (15)

人の命はげんていなっているのにいきているうちにたくさんのごとをするためにはが**ん**ばらなきやいけないし (12)

雛にんぎょうがももはなといしよにそうしょくします (8)

しかし こくみんの ぜんぶが せいじに むかんしんしては (23)

韓国語には形容動詞という品詞は存在せず、特に漢語の場合、サ変動詞と混乱しやすい。この誤用についてはすでに指摘があるが、以下にその一つを引用しておく。

韓国語では、漢語名詞は **하다** <ha-da> をつけることによって用言化される。この「漢字名詞+하다」の形式は、その漢語名詞の意味が動作性をもっていれば動詞として、状態性をもっていれば形容詞として機能する。したがって、指導の要点は名詞の部分の意味によって動作・作用を表すものか、状態を表すものかを区別し、動作性の名詞には「する」をつけて動詞にし、状態性の名詞には「-だ」をつけてサ形容詞(形容動詞)にするのだということをよく把握させることである。韓国語学習者にとっては漢語名詞を意味分類して考えることが必要なのである。

(『ケーススタディ日本語教育』215～216頁¹⁰⁾)

しかし、漢語(字音語)によっては、「動作・作用」なのか、「状態」なのか、見分けがつきにくい、あるいはつけられないものもある。「活発」「成熟」など、言われてみれば、それぞれ「状態」「動作」のようにも思うが、客観的な基準は見出せない。筆者(金)自身も未だに判断に迷うことがある。

語彙史の面から見れば、明治時代、漢語は著しい増加を見るが、それは、訳語として漢語が多用されたことに依るところが大きい。漢語も外来語の一種であり、その用法についてまだ明らかでない部分もある。例えば、ある漢語について、サ変動詞として認めるかどうかさえ、辞書によって揺れがある場合もある。相沢正夫は、この問題について取り上げ、

例えば「収入」と「支出」、「需要」と「供給」のようなペアで、「支出する」「供給する」とは言うが「収入する」「需要する」とは言わないことや、「独立」「共存」「対立」「中立」の中で「中立する」だけがそうは言わないことな

ど、体系的な視点から複合サ変動詞化の可能性をチェックし、情報として整備しておくことも、日本語教育の立場からは必要となる。複合サ変動詞化しないというネガティブな情報が、日本語学習者にとっては、かえって有意義な情報となりうるからである。

と述べている¹¹⁾。

体系化は筆者の力量の及ぶところではないが、今試みに二字の漢語を語基とする動詞、形容動詞、また動詞・形容動詞の両形が見られるものについての一覧を掲げる¹²⁾。

〈動詞のみ〉

合図	暗記	案内	意見	位置	一致	意味	印刷	運転	運動	影響	遠慮	往復	応用	解決	改正	買物
活動	関係	歓迎	観察	感謝	管理	記憶	期待	希望	休憩	教育	供給	競争	共通	協力	記録	禁止
経営	計画	経験	計算	傾斜	契約	結婚	決心	欠席	決定	見学	研究	減少	建設	謙遜	見物	後悔
交換	講義	合計	交渉	交代(替)	行動	呼吸	故障	賛成	散歩	刺激	試験	支度	実験	失敗	質問	
指導	支配	始末	自慢	収穫	集合	就職	修理	授業	手術	主張	出発	準備	使用	消化	紹介	招待
承知	衝突	消毒	証明	食事	所有	診察	進歩	辛抱	信用	推薦	生活	請求	制限	成功	生産	製造
成長	整頓	整理	説明	節約	選挙	宣伝	増加	掃除	想像	相談	卒業	尊重	尊敬	暖房	遅刻	注意
注射	注文	通報	抵抗	徹底	電話	到着	投票	独立	努力	入院	入学	配達	破壊	拍手	爆発	発音
発見	発行	発達	発展	発表	万歳	反射	反省	判断	反応	販売	比較	否定	批判	批評	表現	病気
普及	復習	分解	分離	分類	平均	変化	勉強	返事	貿易	報告	放送	訪問	保護	募集	保証	保障
保存	翻訳	摩擦	矛盾	命令	面会	約束	優勝	輸出	輸送	輸入	用意	要求	用心	予習	予想	予定
予防	予約	理解	流行	利用	旅行	冷却	練習	連続	録音							

〈形容動詞のみ〉

安全	勝手	完全	簡単	危険	偶然	結構	元気	健康	幸福	公平	困難	残念	地味	自由	十分(充分)	
重要	正直	上等	親切	水平	素直	正確	正式	大事	大切	丁寧	透明	得意	特別	熱心	派手	必要
平等	不安	複雑	不幸	無事	不便	平気	平和	別々	便利	無駄	無理	名誉	面倒	有効	優秀	有名
有利	愉快	余計	余分	利口	立派											

〈形容動詞・動詞の両形〉

安心 苦勞 失礼 心配 相当 退屈 適當 發明 反対 貧乏 評判 平行 満足 迷惑 乱暴

いくつか気付いた点を挙げておくと、この調査では三文字以上の語(大丈夫、不思議など)は除外したが、語基の漢語がサ変動詞になるものでも、語頭に否定を意味する語がつくと、

無反応 不(無)案内 不注意 不統一 不徹底 不用意

などのように、形容動詞となるものがある。否定の意味が加わることにより「～していない」という状態、あるいは判断を示すものとなるからであろう。しかしながら例外も存在し、「自由」は、「不自由する」という言い方が可能である。

また、動詞と形容動詞の場合で意味に違いのあるものもある。「發明する」の場合、形容動詞「發明な」は、古くよく使われた言い方であるが「かしこい、利発」の意となる。

さて、以上の一覧から一定の傾向を見出すことは難しい。しかし、逆に、日本語を母語とするものはどのような体系をもって、漢語をサ変動詞、あるいは形容動詞と判断するのであろうか。そこで、「する」以外の動詞がつく場合を考えてみたい。

村木新次郎は、日本語の動詞について、「連絡をとる」「考慮に入れる」といった場合の「とる」「入れる」など、実質的な意味が希薄で、述語形式を作るための文法的な機能をはたしている動詞を「機能動詞」と名付け、このような機能動詞と名詞の結びつき(機能動詞結合)について精緻な考察を行っている。その中で、

「攻撃」「襲撃」「打撃」のような意味的に近似した単語は、いずれも「攻撃を／襲撃を／打撃を かける」といった語結合をなりたせせるが、「攻撃」「襲撃」については、「攻撃する」「襲撃する」という動詞の語形と交替するが、「打撃」については、このような語形(「*打撃する」)が存在しない。「攻撃」「襲撃」という動作名詞は「-する」

とむすびつき、「打撃」は「-する」とむすびつかないのである。語結合には規則性と慣用性が同居しているわけである。¹³⁾

と「慣用性」についても考慮する必要があることを述べ、この他にも「食事をとる」→「食事する」は可能であるが、「朝食をとる」→「*朝食する」は不可能であるという例を挙げている。

さらに村木は、「する」「ある」の交替形が存在することは「機能動詞結合に対しての十分条件にすぎず、必要条件とはならない」¹⁴⁾と述べている。例を挙げると、「よせる」という機能動詞の場合、「信頼を～、同情を～、反論を～、共感を～、関心を～」などと結合するが、この中で、「関心」は「関心する」という形では用いられない。

ところで、形容動詞としての用法があるかどうかという観点から見ると、機能動詞と結びつくということは、その語が動作性を帯びた「動作名詞」であることを示す。現に村木がさまざまな機能動詞と結びつく例として挙げている、かなりの数の名詞のうち、形容動詞としても用いられるものは、以下の数例のみであった。

おしゃべり「～を繰り返す」、罪「～をおかす」

不始末「～をおかす」、無礼「～をおかす」、不均衡「～をひきおこす」

安心「～をもつ」、苦勞「～をかける」、心配「～をもつ」「～をかける」「～にあずかる」、

退屈「～をさそう」、反対「～をまねく」、満足「～を与える」、迷惑「～をかける」、

乱暴「～をはたらく」「～をくわえる」「～をうける」、

このうち「不始末」「無礼」「不均衡」は否定の語がついたものであり、また「安心」「苦勞」「心配」「退屈」「反対」「満足」「迷惑」「乱暴」は、サ変動詞と形容動詞の両形が見られるものである。日本語学習の初級の段階では、このような機能動詞をあまり学習していないが、語彙的な分類を考える上で、参考となる。

さらに韓国語においては、補助動詞 **지다** (jida) が存在し、これは、動詞・形容詞・存在詞に接続して、変化などの意を表す。例えば、以下の語に **지다** がつくると、語によってさまざまな意味になる¹⁵⁾。

①形容詞・存在詞について変化を表す(～くなる、～になる)

暖かい→暖かくなる　ない→なくなる　頻繁だ→頻繁になる

②他動詞について受身を表す(～れる、～られる)

分ける→分かれる　伝える→伝えられる

その他、動詞について「傾く→傾いていく」のように変化の過程や自発的動作・可能などの「～れる」の意に相当する場合もある。日本語でも、「明らかにする」という事象が、可能であり実現された場合「明らかになる」「明らかにされる」という表現がなされる。古典語においても、可能と受身の近さはよく知られていることである。

b.のような誤用は、形容動詞とサ変動詞の混乱に加え、このいわば韓国語における再活用に当たるような補助動詞の影響も考えられる。「無関心になる」「限定される」といったニュアンスを表現したいがために生じた誤用であろう。

2.4 時制

ひとだちはかか^(鍵が)ったとおもったのに大門があけてあるからちよっとめんくらの顔でへやなかをみ^(の)ました。(10)
子供はもう頭が濡^(濡)れた。(24)

いわゆるアスペクトの問題である。「鍵がかけられた」「子供の頭が(雨で)濡れた」のは、過去のある時点での出来事であり、その結果の継続性を表すにはそれぞれ「～ている」(現在パーフェクト)、「～ていた」(過去パーフェクト)を使うべきである。この～タと～テイル・テイタの使い分けは、日本語学習者にとって難しいものの一つであり、誤用の用例数は少なかったものの注意が必要である。

3. むすび

以上、日本語学習者の誤用例を分析してきた。最近は大学等でもFD (Faculty Development) の必要性がいわれているが、自己の担当したクラス分をまとめて分析することにより、このような方面にも益するところがあるかと考える。大方のご叱正をお願いする次第である。

- 1) 鈴木忍『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法 I』凡人社、1978年3月、p. 157～159などに指摘がある。
 なお、韓国語の用例については油谷幸利『朝鮮語入門』ひつじ書房、1996年3月、同『朝鮮語入門2』ひつじ書房、1997年10月、安田・孫・箕輪・李編『日韓辞典』民衆書林、2001年3月などを参照した。
- 2) 1989年6月、角川書店、p. 890 (『基礎日本語』第1～3巻をまとめたもの)。
- 3) 「[～をそむく] から「～にそむく」へ」(『国語語彙史の研究 二』1981年5月、和泉書院)、p. 140～141。
- 4) 中川ゆかり「出会いの表現」(『萬葉』119号、1984年10月)を参照されたい。
- 5) 韓国語でも、例えば「向かう」の意に相当する動詞が、
 海に向かう
 正面に向かって座る
 鏡に向かう
 と、ニ・ヲ両方をとることがあり、個々の語についても今後検討の余地がある。
- 6) 寺村秀夫「[ナル]表現と[スル]表現—日英「態」表現の比較—」(『国語シリーズ 別冊4 日本語と日本語教育 (文字・表現編)』1976年3月、国立国語研究所)など。
- 7) 『日本語教育事典』p. 454「[に]と[で]と[を]〈場所〉」(森田富美子)。
- 8) 『基礎日本語辞典』1989年6月、角川書店、p. 219。
- 9) 注8に同じ、p. 74～75、p. 446～448。
- 10) 岡崎・川口・才田・畠編、1992年12月、桜楓社。
- 11) 「『日本語教育のための基本語彙調査』と複合サ変動詞」(国立国語研究所報告105 研究報告集14) 秀英出版、1993年3月。
- 12) 語の選定にあたっては、便宜的に『NAFL日本語教師養成通信講座 C-2 日本語の語彙・意味(2)』(1987年9月、アルク) 巻末所収の「日本語教育基本2570語」(玉村文郎選定)から筆者の語感によって取り出し、複数の辞書によって確認するという手法を取った。
 辞書により、あるいは辞書と筆者の語感に違いがあったものとしては、以下のようなものがあった。
 「意味」は、「意味する」というサ変動詞の形を見出しに立てていない辞書が複数見られたが、最新の『日本国語大辞典 第2版』にサ変としての用法を示す(「-する」という注記がある)のに従い、また筆者(鍵本)の語感からサ変動詞の例に入れた。「適当」「評判」という語は、現在では形容動詞として使われることが多いが、「適当する」「評判する」という用例もやや古い言い方ではあるが存在し、両形をとるものに分類する。「平行」は、辞書によっては形容動詞として扱われていないものもあったが、やはり『日本国語大辞典 第2版』その他に従い、両形をとるものとする。「科学」「仕事」「病気」は、「-する」という言い方も実際には見られることもあるが、辞書への記載はまだ少数であり、誤用としておく方が無難であろう。
- 13) 村木新次郎『日本語動詞の諸相』ひつじ書房、1991年2月、p. 236～237。
- 14) 注13に同じ、p. 237。
- 15) 用例は、油谷幸利『朝鮮語入門 2』ひつじ書房、1997年10月、p. 30より引用した。